

# 『ゴータ綱領批判』における Genossenschaft 概念について

田 上 孝 一\*

## On the Concept of Genossenschaft in “Critique of the Gotha Programme”

TAGAMI Koichi\*

キーワード：『ゴータ綱領批判』、ゲノッセンシャフト、アソシエーション、兄弟契約、仲間組合

いわゆる「空想的社会主義」に代表される先行者に比べてマルクスは、未来の理想社会を多く語ることにはなかった。しかしそれは、マルクスが未来社会の青写真を全く語らなかつたわけでもなければ、積極的に語らなかつたということでもない。むしろ彼は、その若き日から晩年に到るまで、折に触れて積極的に、来るべき未来社会について語っていたのである。もっともそれは空想的社会主義者、特にフリーエのように詳細を極めたものではなく、断片的で示唆的なものに留まった。原理的に不確定な未来を詳細に語るとするのは予言者的な幻視の成せる業であり、まさにフリーエがそうであったように、科学的叙述と怪奇譚の区別を曖昧にするものだからである。だからマルクスは、『資本論』のような現行社会の科学的分析から自然と類推される範囲内でのみ未来を語ったのであり、未来叙述の抽象的断片的性格は、方法論上の制限である。それはまた、未来への空想奇譚によって、現行社会への科学的分析の信憑性が損なわれることを避けるための禁欲の結果でもあろう。

しかしこのことは、これまで往々にして考えられてきたように、未来社会について語ることそれ自体が非科学的であり、未来について語らないことこそが、マルクスの理論が空想的社会主義ならぬ「科学的社会主義」なのだという思い込みを正当化するわけではない。事実としてマルクスは、原理上の要請として抽象的断片的性格を帯びたものではあるが、

頻回とっていいくらいに来るべき未来を語っていたのであり、生前出版された主著である『資本論』の第一巻は、労働者を収奪する資本が、労働者によって収奪され返す、「収奪者が収奪される」未来予測を結論としていたのである。

未来について語る必要が一切ないのは、歴史に対して強固な決定論の立場を取る場合だけである。全てが必然ならば未来を予想し、歴史の指標を提起する必要はない。このような決定論者としてのマルクス像は通俗的理解の典型だったが、頻繁に来るべき未来を語るマルクスは、その実像が硬直した歴史決定論者ではなかったことを示して余りある。

こうしてマルクスは、決定論ならぬ歴史の可変性を前提した上で、科学的合理性を逸脱しない範囲で来るべき未来への青写真を語っていた。その集大成に当たるのが『ゴータ綱領批判』であり、ここでこそマルクスは、彼の未来社会像を最もまとまった形で提示している。

『ゴータ綱領批判』は短いが、重要な理論的見解が大量に含まれた古典である。短い字数でその全体を検討することはできない。ここでは『ゴータ綱領批判』の最重要概念でありながら、なぜ敢えてこの言葉が使われたのか不明確なため、後世の解釈者にとって研究上のエニグマの一つとなった Genossenschaft について、僅かな気付きではあるが、重要な論点になると思われるところをノートし、今後の研究のための一里塚としたい。

\* 理工学部情報システムデザイン学系非常勤講師 Part-time Lecturer, Division of Information System Design, School of Science and Engineering

『ゴータ綱領批判』では、来るべき未来社会が「ゲノッセンシャフトリヒな、生産諸手段の共有に基づく社会」(MEW.Bd.19., S.19.)と規定されている。ここでいう共有は Gemeingut なので、生産手段を共有財産にするという趣旨であろう。この点、気を付けたいのは、こうした生産手段の共有財産化は、生産手段を各人が私的に所有するというのではないということだ。というのは『資本論』において、かつてあったが既に解体されて失われた個人的所有が新たに再建されることが謳われていたが、未来で復元される個人的所有は、以前のような私的所有ではなくて、生産手段の Gemeinbesitz に基づいているとされているからである (MEGA II-10., S.685. 拙著『マルクス疎外論の視座』本の泉社、2015年、21-22頁)。『ゴータ綱領批判』においても、生産手段は所有 (Eigentum) ではなくて占有 (Besitz) されるべきだという認識に変更はないはずだから、Gemeingut となった生産手段は各人が所有しているのではなく、占有しているのだと考えられる。

問題はこのような生産手段を Gemeingut としている社会が、genossenschaftlich と形容されていることである。つまり、生産手段を Gemeingut とするような社会がゲノッセンシャフトリヒなのであって、ゲノッセンシャフトリヒであることが、来るべき理想社会の基本性格とされているのである。ではゲノッセンシャフトリヒとは何なのか。

この点、これまでの研究では、殆ど何も解明されてないに等しい状態だった。例えば大月版全集ではこの箇所を「協同組合的社会」と訳している。確かにゲノッセンシャフトという名詞には協同組合という意味もある。しかし協同組合的とは何を意味しているのだろうか。この社会の生産単位が私企業ではなくて組合になっているというのは確かだが、ただ組合のという意味だけならば、「協同組合的社会」というように、社会の基本性格を表す形容詞としてゲノッセンシャフトという言葉を使うのは、不自然ではないか。

『ゴータ綱領批判』で、高次の共産主義段階にあっては、富のあらゆる泉が溢れ出す (alle Springquellen des genossenschaftlichen Reichtums voller

fließen) という表現が使われているのは有名である (MEW.Bd.19., S.21.)。経済的希少性が克服されて、特別な奢侈品はともかく、生活上の基本財が全住民に行き渡り、資本主義を支配していた貧困が完全に克服されるという話だ。かつては素晴らしい未来像と賞賛されていたが、今はむしろエコロジ的観点の欠如した、生産力発展至上主義的な旧態的歴史観として、否定的に語られることの方が常態化している印象がある。ところが、ここで噴出すとされているのは富一般ではなく、ゲノッセンシャフトリヒな富なのだ。

この点、英語圏の研究者の殆どはドイツ語原文に無頓着であり、その代表的な一人も、この箇所をマルクスが物質的な富裕に対して過度に楽天的であり、「100年以上も前であれば、自発的平等の可能性を無限と言えるほどの生産力への期待の上に基礎づけることは許されたかもしれないが、人類の物質的状况についてそのようにエコロジ的危機に直面する以前の思考法を維持するのはもはや現実的ではない」(G.A.コーエン、松井暁・中村宗之訳『自己所有権・自由・平等』青木書店、2005年、177頁)などといっている。しかしマルクスが溢れ出すとしたのは富一般ではなくて、あくまでゲノッセンシャフトリヒな富なのである。コーエンに限らず、これまでの解釈者の殆どはこの限定を無視してきたが、この箇所を正確に理解するためにはこの形容詞を飛ばしてはいけないのである。しかしこれまでの解釈は概ね、これを無視してマルクスを生産力至上主義者だと、短絡的に決め付けていたのである。

といっても、英訳だけでマルクスを読解するのを常とする英語圏の研究に限らず、ドイツ語原文を綿密に検討しているはずの我が国のマルクス研究にあっても、ここにいうゲノッセンシャフトリヒが何を意味するかは、明確にされてきたわけではなかった。大月版の全集にしてからが、先の箇所は「協同組合的」だったのに、こちらは「協同的」になっている。組合が抜けてしまっている。組合が付いていればまだ、富の生産単位が組合であることを伺うことができるが、組合を抜かして単に協同的だと、それが何を意味するのかさっぱり分からなくなる。

しかしこの訳者の逡巡は、正しい解釈の方向性を

示唆している。マルクスが未来社会の富が組合によるものであることを強調したかったのだとすれば、誤解の余地なく名詞形を使い、**genossenschaftlicher Reichtum** のような分かり難い形ではなく、**der Reichtum der Genossenschaft** のような、はっきりした表現を取ったはずだからである。名詞ではなくて形容詞になっているのは、それが組合の富だということをいいたいからではなく、富の基本性格を示したいからである。単なる富一般ではなくゲノッセンシャフトリヒな富なのである。つまり、「ゲノッセンシャフトリヒな、生産諸手段の共有に基づく社会」の富だからこそ、その社会の富もゲノッセンシャフトリヒな富なのである。「協同的」という、それ自体は意味不明な訳語はしかし、社会そのものの基本性格を形容したいという点では、正しい方向に向いたのである。

こうしてゲノッセンシャフトリヒな富とは単に組合の富ということではなく、そうした組合によって作り出される富の性質を意味するはずのものである。マルクスが来るべき未来社会の基本性格をどのように表現しているか、はっきりしている。アソシエーションである。そもそも組合それ自体がアソシエーションであり、組合が望ましい組織であるのは、各人がアソシエート＝連合して創られるものだからである。従ってゲノッセンシャフトリヒとは先ずは、マルクスが他の多くの文献で、アソシエートしたという表現で表される当のものであるはずだ。

では **Genossenschaft** は **Assoziation** の同義語であり、**genossenschaftlich** は **assoziiert** と同じ意味で使われていると考えていいのだろうか？

確かにそう考えても大過ないと言えよう。とはいえ、あくまでも別の言葉なのである。しかも、明らかに極めて重要な箇所使われている。やはりマルクスは無造作に言い換えているのではなくて、敢えて使っていると考えべきだろう。しかし、だからといって全く別の意味で、新規なことを言おうとしていると考えることもできない。あくまでも来るべき社会がアソシエーションであることを前提にした上で、そのアソシエーションの特徴を際立たせるために使っていると見るべきだろう。同じくアソシエーションであるという意味ではニュアンスの違い

の範囲ではあるが、興味深いプラスアルファが、**Genossenschaft** という言葉に含まれているのではないか。

私は以前ウェブ上で、8回にわたりマルクス入門の連載を持っていたことがあったが、その中で次のように述べたことがある。

マルクスが敢えてゲノッセンシャフトという言葉を使ったのは、新社会のアソシエーションの性格を一層強調するためだったと考えられる。というのは、**Genossenschaft** の語幹である **Genosse** には「同志」や「仲間」という意味があり、更には動詞の **genießen** には「楽しむ」や「享受する」という意味があるからである。一緒に楽しめるような人間関係が仲間である。新社会が **Genossenschaft** であるということは、それが際立って友愛的なアソシエーションであるということである（「マルクス入門 第六回 資本主義の本質と共産主義の核心——『資本論』と『ゴータ綱領批判』——」（Web TOKAI、2010年10月、現在は閲覧不可）。

私は以上の結論を、ほぼマルクスのテキスト読解のみで導いたが、これを裏打ちするような知見を求めつつも、得られないでいた。ところが全く偶然に、勝又洋子本学理工学部教授の論考「仮面と舞踏による空間物語の演出—ディオニューソスの祭からヴェネツィアのカーニヴァルへ—」（世界史研究会『世界史研究論叢』第5号、2015年、所収）を読んで、重大なヒントを得たのだった。

この論考はタイトルが示すようにマルクスとは直接関係はないのだが、この中で、かつてヴェネツィア共和国で行なわれていた「海との結婚」という儀式を説明する次の件を読んで、大いに驚かされたのである。

この「海との結婚」はディオニューソスと大司祭夫人の結婚の儀式を踏襲しているが、アンテステーリアの式典が秘儀として執り行われたのに比べて、「海との結婚」は、市民が立会人となって見ている前で、総督が海に金の指輪を投じて結婚を宣言する。どちらもヴァーチャルなお伽噺風の儀礼だが、アンテステーリアの式典は呪術的な要

素があり、一方市民が立ち会うヴェネツィア共和国のこの儀礼は、前近代的ではあるけれど、民主主義的要素を含んでいる。マックス・ヴェーバー (Max Weber 1864-1920) は、このような呪術的な方法で同盟を結ぶことについて、「兄弟関係を結ぶ行為」と位置づけている。ヴェーバーによれば、共同体的 (ゲマインシャフト) な社会は、貨幣を媒介とした商品交換によって成立している。総督が海に投じる金の指輪はまさに貨幣を象徴しているが、共同体市民を代表する総督がアドリア海を舞台に示す行為は、結婚という人と人との間に結ばれる「身分契約」である。これは兄弟契約＝仲間 (ゲノッセ) と呼ばれる関係によって、この水上都市での運命共同体＝ヴェネツィア共和国の在り方を宣言している (21 頁)。

勿論マルクスの展望するゲノッセンシャフトには呪術的要素は含まれていない。しかしその社会の基本性格は、アソシエーションという言葉では表現し足りないまでにアソシエティヴで友愛的なものだということなのだ。この社会においては、市民社会の人間関係がまるで家族間の関係と同じであるかのような友愛的なものに転じている。だからゲノッセンシャフトリヒは、「協同的」というような曖昧とした言葉ではなく、はっきりと「兄弟的」や「仲間的」というような、家族次元の人間関係を示す言葉によって訳されるのがふさわしいということになる。ウェブ連載では次のように提起した。

協同組合というよりも、ゲノッセンシャフト本来の意味が強調されていると考えられる。そうすると協同組合的と訳すのではなく、少なくともアソシエティヴと訳すべきであり、しかもそこには仲間同士の合意が含意されているということである。つまり「ゲノッセンシャフトリヒな富」というのは、その意味内容からすれば、**仲間の間で十分に協議して納得した富**ということになるのである。これにぴったり当てはまる訳語はないので、こうした意味を踏まえた上で、敢えて訳さずに「ゲノッセンシャフトリヒな富」としておくの

が正解なのである。

以上の認識を基本的に変更する必要は感じないが、マルクスがゲノッセに兄弟的な、家族的な次元での仲間関係を含意させていた可能性が分かった今となつては、訳語を定めないよりも、積極的に「兄弟組合的な」や「仲間組合的な」といったような、家族的な原理によって連合している組合の富を意味する言葉を用いるのが望ましいのではないかという気がしないでもない。無論マルクスとヴェーバーは時代が逆なので、マルクスがヴェーバーを読んだのではないが、後にヴェーバーが問題にするような兄弟契約的な人間関係をマルクスが自らの歴史研究の中から見出して、これを未来社会のあり方に投影したということは、大いにありうる。この事実が確認できれば、よりはっきりとしたことがいえると思うが、未だ調査できていない現地点では、マルクスがゲノッセンシャフトに兄弟関係を思わせる家族的な次元での人間関係を含意していたという可能性を示唆するに留めたい。

それにしても、こうしてみるとコーエンのような通俗的解釈の薄っぺらさが、嫌が応にも感じられる。マルクスが溢れ出すといていたのは単なる物質的な富一般ではなく、兄弟組合的な富なのである。従ってその富のあり方は兄弟的な仲間となったアソシエーションの人々によって、完全にコントロールされているのである。生産力をコントロールできるような人間関係こそが、ゲノッセンシャフトだからである。だからその富は原理上、生産力へのコントロール不全から生じる「エコロジー的危機」を生み出すようなものではあり得ないのである。

我々はマルクスを、時代を超えた絶対的真理を主張していたかのように神格化することは慎むべきだが、真摯な読解の努力をせずに通俗化して、何か乗り越えたつもりになることもまた、厳に慎むべきなのである。

付記 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金 [基盤研究 (C) 課題番号 16K03532 (分担者)] に基づく研究成果の一部である。